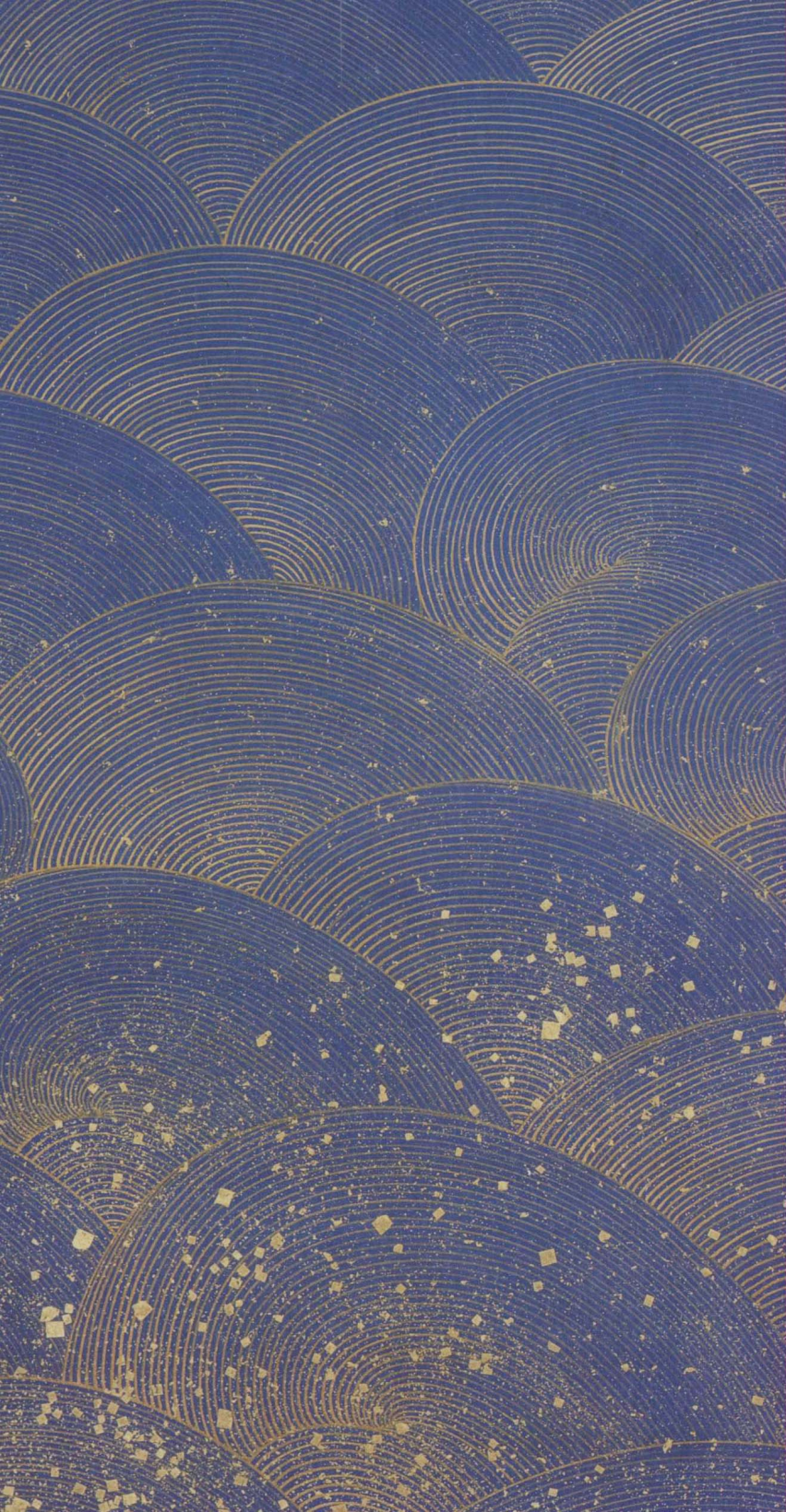




げんじものがたり まきろく  
源氏物語 卷六

一九九七年九月三日 第一刷発行

著者 瀬戸内寂聴

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

〒番号 一―二―〇一 東京都文京区音羽二―二―二一

編集部 東京〇三―五三九五―三五〇〇

電話 販売部 東京〇三―五三九五―三六二一

製作部 東京〇三―五三九五―三六一五

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価は函に表示してあります。

© Jakuchō Setouchi 1997, Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部までご連絡ください。送料  
小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお  
問い合わせは、文芸局までお願いいたします。  
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じら  
れています。



ISBN4-06-252106-7 (文芸)

N. D. C. 913 292p 23cm

瀬戸内寂聴 訳

源氏物

江戸学院図書館  
蔵書章

卷六

若菜上  
若菜下

講談社

◆  
目次

若菜上  
—  
5

若菜下  
—  
129

源氏のしおり(訳者解説)——254

参考図録 267  
語句解釈 289

校閲 八寫正治  
小山清文

装画 石踊達哉

函表 「陵王」(御法より)五〇号変

函裏 「胡蝶」二〇号S

表紙 「青海波」四曲半双

口絵 「MISU」二一〇号変

「若菜上」八〇号S

「若菜下」四〇号変

装丁 辻村益朗

題字 国宝「源氏物語絵巻」田内函蓋表より 徳川美術館蔵

若<sup>わか</sup>  
菜<sup>な</sup>  
上

朱雀院は、先日の六条の院への行幸があつたあたりから、ずっと御体調を崩され御病気でいらつしやいます。もともと御病身でいらつしやいましたが、この度はとりわけ御病氣を心細くお感じになりました。

「長年の間、出家の願いが強かつたのだが、母君の太后が御在世の頃は、何事につけても御遠慮して、今まで決心がつかなかったのだけれど、やはり出離の道に心が惹かれるのだろうか、何だかもう長くは生きていられないような気がする」

など仰せられて、御出家なさるための、御用意をあれこれと遊ばされるのでした。

御子たちは、東宮のほかに、姫宮が四人いらつしやいます。

朱雀院のお妃たちの中で藤壺の女御と申しあげたお方は、先帝の皇女で、先帝の御在位の時に臣下になられ、源氏の姓を賜つたお方でした。

朱雀院がまだ東宮でいられた頃に入内なさって、やがては後の位にもお定まりになるべき筈でした。ところがこれといった御後見もいらつしやらず、母君のお家柄も大したことはなく、頼りない更

衣腹いばらの御誕生でしたから、入内後のお暮しぶりも心細そうでした。

弘徽殿こうきでんの太后が朧月夜おぼろづきよの尚侍なうしのやうみを後宮こうきゆうにお入れになって、まわりの方々がとても肩を並べられないほどに、後押しなさいましたので、藤壺の女御は氣圧けいあつされてしまい、帝みかどもお心のうちでは可哀そうにと、いじらしくお思いになりながら、御退位なさいましたので、女御はとうとう御運を逃してしまわれ、今更仕方なく、残念で、御自分の運命を恨めしくお思いの中に、お亡くなりになられました。

そのお方の忘れ形見の女三の宮を、朱雀院は大勢いらっしゃる女宮の中でも、とりわけ可愛くお思いになって、大切にお育てになっていらっしゃいます。その頃、お年は十三、四でございました。

今を限りと、憂き世の縁を断ち、山籠りやまごもしてしまつたら、女三の宮は後に取り遺のこされて、誰を頼りにして生きていかれるだろうか、ただこの宮のお身の上ばかりをお案じなさりお嘆きでいらつしました。

西山のお寺の造営が終りまして、そこへお移りになる御支度をなさいますのと同時に、この女三の宮の御裳着もぎについても御用意遊ばすのでした。

院の御所に御秘蔵していらっしゃる御宝物や、御調度類はいうまでもなく、ほんのお手遊びのお道具まで、少しでも由緒のあるものは、すっかりこの宮にだけお上げになりまして、ほかのお子たちには、その残りの品々をお分けになるのでした。

東宮は、朱雀院がそうした御病氣の上に、御出家の思し召しまでおありになるとお聞きになりまし

て、院の御所へ行啓なさいました。

母君の承香殿しやうかうでんの女御もお付き添いになって参られました。このお方は格別の御寵愛を受けられたわけではありませんけれど、東宮がこうしてお生れになられたのは、やはりこの上もなく結構な御宿縁なので、院もこれまでの長い年月の、積もるお話を細やかにお交わしになっていらっしやいます。

東宮にも、国をお治めになる御心得など、万事につけてこまごまお教えになるのでした。東宮は幼年の割には、たいそうしつかりと大人びておいでになり、御後見の方々も申し分なく御立派な名門ばかりでいらっしやいますので、院はその点についてはすっかり安心していらっしやいます。

「わたしはもう、この世に何の恨みの残るようなこともありません。ただ女宮たちが大勢あとに残されているので、その将来が案じられるけれど、それが臨終きりぎりすの障りさわりにもなりそうです。これまで人の身の上をあれこれ見聞きしたことから考えても、女はとかく自分の心に反して、軽率なことをして、浅はかだと人の非難を受けるように生れついているのが、実に残念で悲しいことです。あなたが御即位なさった御代みよには、何かにつけて、お忘れにならず、あの女宮たちのお世話をしてあげて下さい。その女宮の中でも、しっかりした後見のある人は、そちらに世話を任せてもいいのです。ただ女三の宮だけが、まだ年端としはもゆかず、ずっとわたし一人だけを頼りにしてきたので、わたしが出家してしまつたら、後は寄るべくもなくなり、どんな世の波風に漂いさすらうことかと、それだけがしきりに心にかかって、悲しくてなりません」

と涙のお目をお拭きになりながら、しみじみとお氣持をお打ち明けなさいます。

承香殿の女御にも、女三の宮に好意を持つて下さるようお頼みになります。けれども女三の宮の御母の藤壺の女御が、誰よりも御寵愛が深く時めいていらつしゃった頃には、どなたも藤壺の女御と競争なさつて、睦まじい御仲ではなかったものですから、その氣持の名残で、たしかに今ではことさらに憎いなどと思わないにしても、ほんとうに真心こめてお世話しようとまでは、お思いにはなれまいと、推量されるのでした。

明けても暮れても朱雀院は女三の宮のことを御心配になり嘆いていらつしゃいます。

その年も暮れゆくにつれて、御病氣がほんとうに重くお進みになられて、御簾の外にもお出になりません。これまで御物の怪のためにときどき御病氣になられることもありましたが、こんなにつまでも長くつづいて絶え間なくお苦しいということはなかったので、今度ばかりは、もう最後だと思ひになりました。

御退位は遊ばしましたけれど、やはり御在位中からその御恩顧を蒙った人々は、今でも前と変わらずお慕わしくありがたい院の御有り様を、心の慰め所として、いつも参上してお仕えしておりましたので、人はどなたも皆、心の底から残念に思つていらつしゃいます。

六条の院からお見舞いがしきりに寄せられます。源氏の君御自身もお伺いなさるとおっしゃるのをお聞きになつて、朱雀院はたいそう喜びになります。

まず夕霧の中納言が参上なさいましたのを、御簾の内にお召し入れになつて、細やかに御物語をな

さいます。

「亡き父院が、御臨終の時に、多くの御遺言ゆいごんをなさいましたが、その中にあなたの父君の御事と、今の帝の御事を、とりわけわたしに御遺言ゆいごんされました。いざ帝の位につくと、帝の自由にできることは限度があるのです。そのため、わたし個人の内心の好意は一向に変わっていないのに、ちよつとした過失から、源氏の君からお恨みを受けるようなこともあったと思われまゝ。ところがあの方は、この長い年月、何かにつけてその頃のことを恨んでいらっしゃるような御様子は、まったくお見えになりません。賢人といわれる人でも、自分の身の上のこととなれば、いつもとは違って、感情に流され平静を欠き、必ずその復讐ふしゅうをしたり、曲がったことをしでかす例が、聖代の昔でさえも多かったのです。ですからいつかは、そんなお心が源氏の君にもちらりと洩れるのではないかと、世間の人もそういう目で疑って見ていたようですが、とうとう最後まで耐え忍び通されて、東宮などにも好意をお寄せ下さっています。今ではまた、明石あかしの姫君を東宮妃として入内させて、わたしとこれ以上ない親密な仲になって、睦まじくして下さるのを、心の中では無上に嬉しく思っています。

生来わたしは愚直な人間の上に、子ゆえの闇に迷い、頑固な見苦しいことをしてはならないと思ひ、東宮のことはかえって他人事ひとことのように、源氏の君にお任せしきって無関心になっています。もつとも今の帝の御事は、故院の御遺言に違わず、讓位してききましたから、御覽のように、末世の明君として、これまでのわたしの治世の不面目を、挽回して下さっています。わたしの望み通りで、まことに嬉しく思っています。この秋の行幸から、昔のことが色々いっしょに思い出されて、源氏の君のこと

がしきりになつかしくお会いしたく気がかりでなりません。お目にかかって直々申しあげたいこともさまざまございます。かならず御自身でお越し下さるようにと、あなたからおすすめて下さい」

など、涙ながらにおっしゃいます。

夕霧の中納言は、

「過ぎ去った昔のことは、わたしなどにはなんともわかりかねます。成人して朝廷にもお仕えしているかたわら、世間のこともいろいろ見聞きしてまいりました間に、大小の事柄についても、親子どうしの内々の打ち明け話の折にも、昔辛いことがあったなど、父はついぞ一言も仄めかしたことはありません。

『こうして政治の御後見を途中で御辞退して、静かな出家の願いを叶えるために、すっかり隠棲して後は、世間のことは何事も一切あずかり知らないようにしているので、故桐壺院の御遺言通りにもお仕え申しあげていない。朱雀院が御在位の時には、わたしの年も若く、器量も不足だったし、偉い目上の方々が大勢いられたので、朱雀帝にお仕えしたいという真心を充分に尽くして御覧いただくこともなかった。朱雀院が、今のようにならば政治から離れ、のどやかにお過しになっていらっしやる折だから、時々参上して、心の内を隔てなくお話し、お伺いしたいのだけれど、やはり何となく、准太上天皇などという大層な位をいただいて、窮屈な身分になってしまつては、軽々しく動けず、つい自然に月日を過してしまつた』

と、時折嘆息して話しております」

などと、申しあげます。

夕霧の中納言は、まだ二十にも足りないくらいのお若きですけど、すっかり整っていて、御器量も今を盛りに色艶が輝くようで、たいそう綺麗なのに、朱雀院はお目をとめていらっしやいます。今その処置にお悩みになっていらっしやる女三の宮の御結婚の相手に、この人物はどうかなど、お心の中の人知れずお考えつきになられます。

「近頃は太政大臣の姫と縁談が整って、すっかりそちらに住みつかれたそうだね。ここ数年、何か納得のいかないうような故障の話を聞いていて、気の毒に思っていたが、結婚の噂を聞いて一安心した。しかし一方やはり少々妬ましい気もして、残念にも思っている」

と、仰せになる御表情を、夕霧の中納言は、いったいどういうおつもりでおっしゃるのかと、不審に思い、あれこれ考えめぐらします。院が女三の宮のお身の上をいろいろ御心配なさり、お困りの末に、「婿として適当な人があれば、姫宮を託して、心おきなく出離したい」と、お考えになって、お口にもされたのを、洩れ聞いた機会もありましたので、そのことを仰せになっていられるのかと、中納言は気がつきました。しかし、どうしてすぐ、呑み込み顔にお返事など出来ましようか。ただ、「わたしの様に頼りない者には、なかなかいい縁も見つかりかねまして」

とだけ申しあげるにとどめました。

女房などは、几帳などの隙から、夕霧の中納言を覗き見して、

「まあ、なんてすてきなこと。またとはない御器量や物腰でいらっしやるのね」

「ほんとうに御立派なこと」

など、集まってお噂しているのを、年寄りのぼけた古女房は、

「いやいや、そう言っても、源氏の君がこれくらいのお若さだった時の御様子とは、とても比べ物になりませんわ。ほんとうにあのお方は目もまばゆいくらいにお綺麗でいらっしやいましたもの」

など言い合っているのを、朱雀院はお聞き遊ばして、

「全くあの方は、御様子が世にも稀まれなすばらしいお人だった。今はまたあの頃より、いつそう老成して立派になり、光るとはこのようなことを言うのかと思われるほど、匂やかなお美しさが加わっていらっしやる。威儀を正して公務に携わっていらっしやる点から見ると、凛りんとした端麗さに目もくらみそうな感じがするが、一方、くつろいで冗談をいったりふざけたりなさる時には、並々でない愛嬌あいきょうがあふれるようで、そういった方面でも人なつっこく惹きつけられる気がする点では、肩を並べられる者も全くなかったほどだった。何事にも前世の果報が推し量られる、世にも珍しいお人柄だった。幼い時から宮中でお育ちになられ、桐壺帝から限りなく可愛がられて、まるで撫でるように大切にされ、帝は御自分の御身にかえてもとまで御寵愛していらっしやった。それでも源氏の君は調子に乗って驕おごったりせず、へりくだって、二十はたちになるまでは中納言にもならなかったものだ。

たしか二十一年の年に、宰相で大将を兼ねられたのでなかっただろうか。それに比べて夕霧の中納言が、ずっと早く昇進しているのは、親から子へと世の声望がだんだん高くなっていくものらしい。たしかに政治向きの学識とか心構えなどは、この中納言もほとんど源氏の君に劣りそうでもなく、たと

えその見方が誤っていたとしても、ますます貫禄がついてきたという評判は、何としても格別のようだね」

などとおほめになります。

朱雀院は、姫宮がたいそう可愛らしくて、あどけなく無邪気な御様子を御覧になるにつけても、

「この女三の宮と結婚して大切に扱って可愛がつくれ、また一方では、未熟な面は大目に見て、かばって教えてさしあげられるような、頼りになる人にお預けしたいものだが」

などお話しになります。年配の主だった乳母たちを幾人かお呼び出しになって、御裳着の支度のことなどお指図なさるついでに、

「六条の院の源氏の君が、式部卿の宮の姫君、紫の上をお育てになったように、この女三の宮を引き取って大切に育ててくれる人はいないものだろうか。臣下の中にはそうした人とはとてもいそうにないし、今の帝には秋好む中宮がついていらつしやる。その次々の女御たちにしても、たいそう高貴な身分の方ばかりを揃えていらつしやるから、しっかりと後見もないまま後宮に入れば、かえって辛いだろう。あの夕霧の権中納言がまだ独身でいた頃に、それとなく打診してみるべきだった。あの人はまだ若いけれど、非常にすぐれていて、将来有望な頼もしい人物と思えるのに」

と仰せになります。乳母は、

「夕霧の中納言は、もともとたいそう生真面目なお方で、長年、太政大臣の雲居の雁の姫君に思いを寄せて、ほかの人には見向きもなさらなかったのですが、その恋が叶って御結婚なさいましてから

は、いつそうお心を動かすことはなかうと思われます。それよりあの御父の源氏の君のほうが、かえって今でも何かにつけて、女性に興味をお抱きになるお心が絶えないようにお見受けします。とりわけ、高貴の御身分の姫君をお需<sup>もと</sup>めになるお氣持が深くて、朝顔の前斎<sup>ぜんさい</sup>院などを今でもお忘れになれなくて、何かとお手紙などさしあげていらっしやるそうでございます」

と申しあげます。

「いや、その相変わらずの浮氣っぽい御性質こそ、どうも氣がかりだけれど」

と、朱雀院は仰せになりますものの、いかにも、大勢の女君たちの間に仲間入りして辛い思いをさせられ、心外なことがあるとしても、やはりこのまま親代わりということにして、乳母たちのいうように、源氏の君に姫君をお預けすることにしようか、などとお考えになるのでしょうか。

「ほんとうに少しでも世間並みな結婚をさせたいと思う娘を持つ親なら、同じことならあの源氏の君のそばに添わせてやりたいと思うだろうね。どうせ長くもないこの憂き世に生きているうちは、あの源氏の君のようにすべてに満ち足りた有り様で過したいものだ。わたしがもし女だったら、実の兄妹であつても、かならず慕い寄つて睦まじい仲になっていただろう。若かつた時などは、よくそう思つたものだ。わたしでさえそうなのだから、まして女があの人にだまされたりするのは、ほんとうに無理もないことだ」

と仰せになつて、お心のうちでは、臘<sup>ろう</sup>月<sup>げつ</sup>夜<sup>よ</sup>の尚<sup>なう</sup>侍<sup>しのかみ</sup>の事などを自然に思い出していらっしやるのでしょう。